

「心」を育てる

高三

知らないことを恐れ、自分からできるだけ遠ざけたいという感情は、誰しもが持っていると思います。それがだんだんと膨れ上がり、自分とは違うものと判断し、排除しようとする、それは差別へと向かっていきます。最近特に大きな問題となっている、スポーツの試合における人種差別的な言動も、このような無知や無関心によるものではないでしょうか。誰もが持つ、無意識の内に生まれた感情から、こんなにも簡単に差別が生じてしまう。では、差別や排除を世界からなくしていくために、私たちはどうしていけばよいのでしょうか。

蓄積されてきた自分の経験から何かしらの行動を起こしたとして、正しい行いにつながるかは人それぞれです。人の善悪に対する考えが一樣でない限り、同じ物事であっても、見る人によっては善にもなり、悪にもなる。こういった状況が生ま

れるのは、三者三様の人間社会の中では当然のことです。

ところで、あなたには自分の考えが周囲の意見から外れてしまった時に、言いようのない不安に駆られることがありますか。周りの顔色をうかがって、多数の意見に迎合することはありませんか。私もやはり、周囲の気持ちを推し量り、クラスの中で一人だけ逸脱した意見を言って、周囲からつまはじきにされたり無視されたりすることのないようにと、窮屈な気持ちになることがあります。このような気持ちは、小学校・中学校・高校と学校教育の中で自然と培われた感情なのかもしれません。「長いものに巻かれる」というような雰囲気、学校の中にあるからではないでしょうか。人間の経験や考え方・感じ方は、千差万別で十人十色であるはずです。そんな中で私たちはなぜ同じような意見にまとまっていかなくてはならないのか。誰かと違うということ、決して悪いことではないはずです。大勢の考えと違った意見を受け入れてもらえる環境があつたなら、自分の中にはない新しい考えや要素を持った人々と出会い、

更なる成長が望めると思います。

今、あちこちでグローバル化が唱えられています。世界中の人たちと交流し、コミュニケーションができる人材が求められています。そんな中で違いに寛容でない子どもたちが多いのでは、グローバル化の流れに逆行することになります。このままでは、近い将来、日本の存在価値が問われるような大きな問題になっていくのではないのでしょうか。そうならないために、「みんなと同じ」ということから外れてみる必要があるのではないのでしょうか。それが次世代を担う子どもたちの「心」を育てることだと、私は思います。

国際社会に生きる人間として、違いを受け入れる姿勢を持ちながら、各々が確固とした意見を持って善悪を判断し、自分の考えで行動する。そして個々の意見が尊重される環境が整ったとき、この国には素晴らしい人材が生まれていくと思います。

